

2025年度（令和7年度）学校評価自己評価表

向丘中学校区	校番20	福山市立 水呑小学校
最終更新日		2026年（令和8年）2月12日

I 福山市

ミッション

福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。

ビジョン

各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区	前年度学校関係者評価の主な内容 ・思春期の子どもたちを指導するのは大変だと思いますが、「主体性」と「感謝する人間力」を育む教育を引き続きお願いします。	児童生徒の現状 ・行事や各取組において、挑戦したい内容を協議した上で、仲間と実現を目指す姿勢が見られる。 ・学習に粘り強く取り組む生徒が増えてきた。 ・個々の様々な状況が要因となり、長期欠席に陥る児童生徒が増えた。	育成する 資質・能力 めざす子ども像 (義務教育修了時の姿) 中学校区として統一した取組等	主体性、自己理解、課題発見・解決力 人とかかわり合いを大切にし、学ぶ意欲を持ち、自分の生き方を主体的に考える子ども ○自校の取組を深く理解し、自主性・主体性を発揮し、「子ども主体の学び」の実現に向けて取り組む。 ○各校の実践や研究についての交流を深め、職員の主体性の向上や意識改革を図る。 ○お互いの具体的な実践交流から課題意識、自己研鑽の意欲を持ち、個人的に授業参観、放課後の相談等の教職員が起点となる研修を推進する。
---------	--	--	---	--

Ⅲ 自 校

ミッション 自分で考え、判断し、決断して、行動できる子の育成 ～探究する授業づくり・自治できる学校づくり～		育成する 資質・能力	主体性	課題発見・解決力	自己理解
学校教育目標 自ら学び 心豊かで たくましい 水呑っ子の育成		めざす 子ども像		自分の考えと友達の考 えを比べながら協働的に 課題解決をしている児童。	自分自身を見つめ直す ことで、自分の考えを持っ たり、自信をもって他者と 関わったりすることので きる児童。
現 状		研究	テーマ	じっくり考え 共に考え 自分の言葉で表現し、 確かな力を身に付ける児童の育成 ～Joyful Learning を目指して～	
＜児童生徒＞ ○主体的に学ぼうとする意識・意欲に高まりがみられるようになった。 ○自己肯定感が高まり、挨拶や学ぶ意欲に、良い変化が見られるようになってきた。 ●基礎的な学習内容が定着しておらず、学習理解に困難さを示す児童がいる。 ●ゲームや動画視聴の長い児童が多く、生活習慣の乱れが見られる。 ＜授業＞ ○児童に選び決定させる場面を取り入れた学習活動を計画できた。 ○個の課題や困り感をつかみ、授業づくりを進めようとする、教師の意識が広がった。 ●児童が授業の中で学んだことを定着させ切ることに課題がある。 ●教科の専門性や系統性を踏まえた深い教材研究が必要である。			内容等	・算数科を中心とした授業研究 ・自分の伸びを実感できる学びファイルの活用方法の拡大 ・基礎学力、集中力、自己肯定感の育成をめざすチャレンジタイム	
		めざす授業の姿		【主体性】「考えることはドキドキ・ワクワクの宝石箱」 児童が、教材に興味を抱き、学び方を自分たちで選択・決定しながら、粘り強く課題解決に向かっている 【協働】「みんな大好き！語り合おう！創り上げよう！」 児童が、自分の考えと友達の考えを比べながら協働的に課題解決に向かっている。 【表現】「あふれる自分の思いを発信しよう！」 児童が、自分の考えを持ち、自信をもって多様な方法で友達に伝えあい、課題解決に向かっている。	

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価							福山市立 水呑小学校								
年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	力 _セ 達 _成 評価	力 _セ 達 _成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力 _セ 達 _成 評価	力 _セ 達 _成 評価	総合 評価	改善方策
1	子ども主体の 学びを通して、確かな力 をつける学校 づくり	★	新規	じっくり考え、 共に考え、自分 の言葉で表現 し、学んだこと を定着させる 授業づくり	・児童のレディネス チェックと躓きを 踏まえた単元計画 及び具体的支援の 準備 ・基礎学力と集中 力、自己肯定感を 育てるチャレンジ タイム	・標準学力調査（国 算）正答率校内平 均 70 % 以上、 40%未満10%以 下 ・児童アンケート 「計算力・漢字力 が高まった」70% 以上	・全国(6年)標 準学力(4・5年) （国算）正答率 校内平均67.9% ・40%未満(算 数科)17% ・児童アンケー ト「計算力・漢字 力が高まった」 91%	4	3	・12 月までに 課題領域の復習 や 40%未満の 児童への効率的 な学習指導を行 い学力の底上げ を図る。	・標準学力(国算)正 答率校内平 68.6% ・40%未満(算数 科)12% ・児童アンケート「計 算力・漢字力が高まっ た」92.9%	4	3	4	・チャレンジタイム 等の時間を活用し て、前学年までの既 習事項の定着を図 る。40%未満の児童 を学年で把握し、つ まずきに合った手立 てを講じる。
1	児童が安心して 通え、自分 の居場所を見 つけることが できる学校づ くり		新規	水呑しぐさ（無 言掃除、あいさ つ、さりげない やさしさ）が実 践できる児童 の育成	・行事、児童会活動、 係活動等における 児童の主体的な活 動の場の設定 ・アセスメントを活 用した児童理解の 徹底 ・様々な場面を活用 して行う児童への 肯定評価	・児童アンケート 「無言掃除によっ て学校がきれいにな った90%以上」 「学校で安心して 過ごすことができ ている90%以上」 ・長欠児童18(昨年 度比-5) 新規長欠児童5以 下(昨年度比-4)	・無言掃除によっ て学校がきれいにな った 88% ・学校で安心し て過ごすことが できている 90.5% ・長欠児童 4 (前年度比-19) ・新規長欠児童 昨年度比-8	4	4	・掃除の取組や肯 定の評価を児童の 安心感や自己肯定 感の向上に更に波 及させるために、 児童の頑張りを認 めて褒める関りを 生徒指導部中心に 全教職員で取り組 む。	・無言掃除によって 学校がきれいになっ た 89.0% ・学校で安心してす こすことができてい る 94.1% ・長欠児童 13 (前年度比-10) ・新規長欠児童 4 (昨年度比-5)	4	3	4	・掃除の取組が教師 主導で呼びかける場 面が多かった。児童 が「学校をよりよく」 という視点で主体的 に取り組めるよう、 活動を仕組む必要が ある。児童の頑張り を日常から見つけ るに評価していく。
1	命や生活習慣 の大切さを実 感し行動化で きる力を育て る学校づくり		新規	主体的に体を 動かすとともに、生活習慣の 改善に取り組 める児童の育 成	・外遊びを促す日々 の指導や委員会活 動の実施 ・ゲームや動画視聴 時間の削減に向け た、保護者啓発や トライウィークの 実施	・児童アンケート 「運動や生活習慣に ついて自分で決め た目標を守るため に努力している。 80%以上」 「ゲームや動画視聴 時間3時間以上 20%以下」	・児童アンケー ト 運動や生活 習慣について自 分で決めた目標 を守るために努 力している。 85.1% ・ゲームや動画 視聴時間3時間 以上 31.4%	3	3	・「7つの生活目標」 をベースとした「ト ライウィーク」活動 の中で、とりわけゲ ーム・動画視聴につ いて3時間を超えな い取組を発達段階に 応じて仕組んだり、 メディアについて学 級懇談や三者懇談等 を通じて保護者へ直 接働きかけたりす る。	・児童アンケート 運 動や生活習慣につ いて自分で決めた目標 を守るために努力し ている。91.7% ・ゲームや動画視聴時 間3時間以上 18.4%	4	4	5	・メディアとの付き 合い方について、日 頃から声掛けを行 う。 ・ゲームや動画視聴 時間が減った児童 が、何に時間を使っ ているのかを調べ、 運動などより良い時 間の使い方を促進す る。
1	職員が意欲と やりがいを持 ち、元気に児 童と向き合え る学校づくり		新規	業務の精選と 効率化を進め、 児童に係る事 項と向き合う 時間を確保す る。	・目的を明確にした 取り組み起案の作 成 ・校務支援システム の有効活用に向け た研修 ・教材研究の時間、 フリートーク研修 の確保	・職員アンケート 「仕事や教材研究 にやりがいや面白 さを感じている。 80%以上」 「校務支援システ ムの良さを実感し ている。80%以上」	・職員アンケー ト仕事や教材研 究にやりがいや 面白さを感じて いる。96.5% ・校務支援シス テムの良さを実 感している。 62.1%	3	3	・学年主任を中心 とした教材研究や 教職員のニーズに 応じた研修の充実 を図る。 ・校務支援システ ムの良さの分かる 研修や使い方の提 示を行う。	・職員アンケート仕 事や教材研究にやり がいや面白さを感じ ている。100% ・校務支援システ ムの良さを実感して いる。81.2%	4	4	5	・主任、主事を中心 とし、全職員が主体 となって教材研究や やりがいの充実を図 る仕組みをつくる。 ・校務支援システ ムの研修をタイムリー に行う。

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]		
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準	
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。